

大分の弥生時代はどこまでわかったのか

〔大野川上・中流域弥生社会再考〕

小 柳 和 宏

はじめに

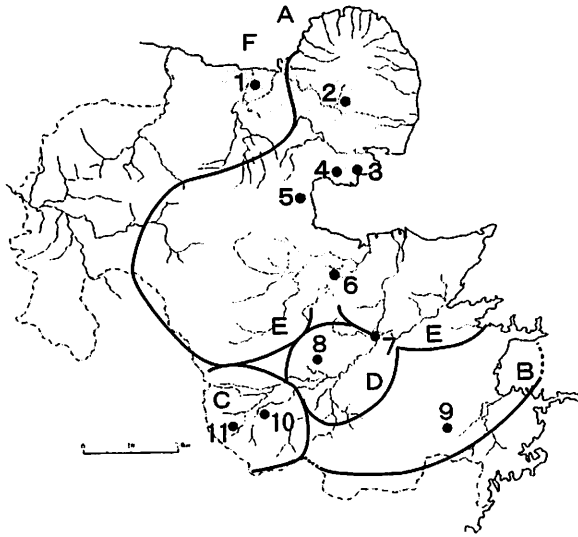
一九八九年に刊行された『大分県史 先史篇Ⅱ』では、一九七〇年代後半頃から急速に進んだ発掘調査の成果を盛り込み、大分の弥生時代についてその当時までにわかったことを最大限記載したものだ。それから二〇年近い歳月が流れた。発掘調査の数はバブル崩壊後もしばらく増加していたので、弥生時代の資料もそれに比例して増えていった。

では、その資料の増加に比例して、『県史』段階に増して大分の弥生時代の説明が進んだのか、ということやや心許なくなる。八〇年頃に一挙に進んだ弥生土器の編年作業、多くの鏡片の発見、そして大野川上・中流域における「畑卓越型」弥生社会の「発見」、といったインパクトのある出来事がすでに過去のものになりつつある。

筆者にはとうてい全体を総括する能力もないので、この小文では、大野川上・中流域を中心として幾つかの点について過去の到達点の論拠を整理し、現在の課題を明らかにしたい。

「小川原式土器」の設定と墓制の伝播

大分の弥生時代を象徴するのは安国寺式土器であるが、その成立について具体的には説明されたことがなかった。そこで、



- 1 野口遺跡
 - 2 小川原遺跡
 - 3 真那井遺跡
 - 4 成田尾遺跡
 - 5 羽室遺跡
 - 6 玉沢地区条里跡
 - 7 舞田原遺跡
 - 8 近中遺跡
 - 9 源六原遺跡
 - 10 大田原遺跡
 - 11 鳩ノ原遺跡
- A、B 安国寺式土器
の主要分布限界
- C 工字状突帯粗製甗の
分布
- D 沈線文粗製甗の分布
- E ハケ調整甗の分布
- F 中期の石棺の分布

第1図 遺跡位置図と各形式の分布

ここではまず安国寺式土器成立に関わると想定される一群の土器を取り上げ、その果たした役割について考えることによって、大分の弥生時代後期に花開いた弥生文化を再考する契機にしたいと思う。

舞田原遺跡第33号住居跡や近中遺跡第2号住居跡で知られる、口縁部が鋤先状になり、頸部と胴部上半、胴部中位の計三箇所複数の突帯を有し、胴部がやや下ぶくれ状を呈する壺がある(第2図)。この土器の位置づけについては、系譜関係も含めて不明確であったが、概ね中期後半から後期初頭あたりに位置づけられているものであった。この土器の位置づけを不明瞭にしている最大の要因は、後期になって旧豊後国域で盛行する安国寺式土器(壺)との繋がりが不整合になっている点であった。

つまり、安国寺式土器の古いタイプのもの(第3図)は、頸部突帯が多条(八本以上)であること、口縁部上面に円形や勾玉状の浮文を付け、外面には連続山形文を施すこと、胴部の形状が下ぶくれとならず、球形に近いか、または最大径をやや胴部上位に有するなどを特徴として持っており、舞田原遺跡などの土器は、そのいずれ

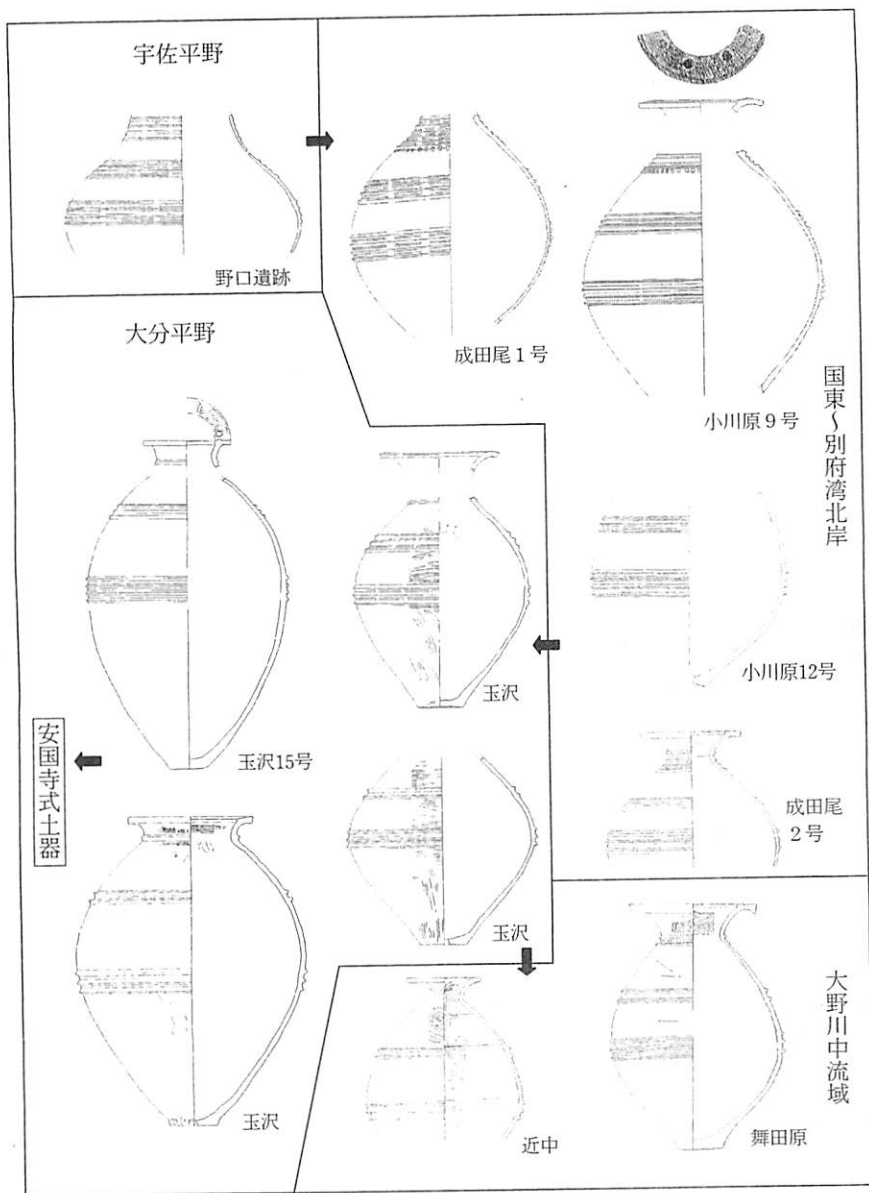
の要素も持っていないのである。

しかし、最近このタイプの土器の広がりが見らくなってきた。日出町成田尾遺跡⁵は弥生時代中期の小児墓地遺跡で、その内に二個体このタイプの土器が棺として使用されていた。2号墓は底部を欠くが、舞田原33号に近い形状を呈している。更に1号墓は口縁部を欠くが、頸部と胴部二箇所に突帯を有している。注目すべきは、頸部突帯下位に勾玉状の浮文を貼付していることである。

更に、国東半島の内陸部中央やや南よりに位置する小川原遺跡⁷でも墓に伴ってこのタイプの土器が出土している。9号墓は頸部上半と底部を欠くが、頸部と胴部二箇所に突帯を有し、成田尾1号墓と同様、頸部突帯下位に勾玉状浮文を持つ。口縁部は鋤先状をなし、上面に円形浮文を付けている。更に12号墓からも頸部から上を欠くが、同様の壺が出土しており、平底である。

現在、このタイプのものは個体数にして県下で十数例に満たないが、明確な特徴を有している。便宜上ここでは「小川原式土器」と呼んでおこう。小川原式土器の最大の特徴は、先述したように頸部と胴部上位、胴部中位の三箇所に複数の突帯を有していることである。さらに、型式変化については個体数が少なく不明瞭ではあるが、概ね突帯の減少や装飾の消滅、更に胴部最大径の低下といった方向で型式変化していると思われる。そうすると、最も古いタイプのものは小川原9号、最も新しいのは近中遺跡のものであろう。

これらの特徴を有する土器を周辺で探すと、宇佐市野口遺跡177号墓⁸の土器をあげることができる。なで肩で、頸部に四條(+a)、胴部上半に四條、中位に四條の断面台形の突帯を廻らせる。突帯断面形状は北部九州中期後半の特徴を有しているが、なで肩の胴部形状は小川原式土器と共通し、豊前南部で見られるこの種土器が国東半島に入り、型式変化を遂げた土器が小川原式土器であると考えたい。使われ方の共通性もそれを支持する。つまり、野口遺跡、小川原遺跡、成田尾遺跡といずれも墓に関わっており、この土器が大型であるが故に、土器棺としてあるいは土器を割った後に破片を石棺状に組み合わせる



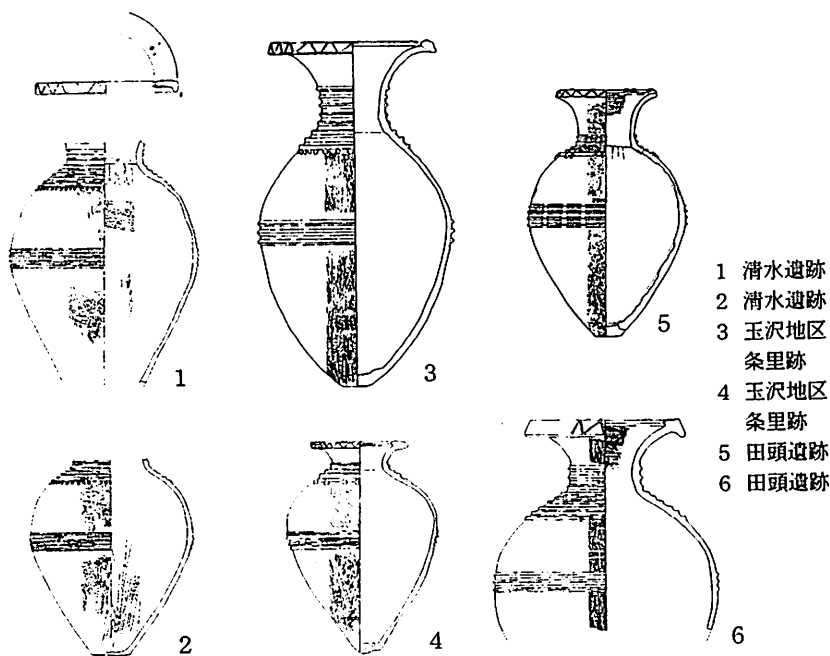
第2図 「小川原式土器」の系譜 (各報告書より転載)

など、あたかも豊前南部の墓制が、国東半島を通過して別府湾岸に伝わったルートを示しているように見える。このルートは実は弥生時代中期の石棺地帯でもあり、宇佐市野口遺跡、旧大田村小川原遺跡、日出町真那井遺跡、別府市羽室遺跡と中期の石棺（一部石材使用も含む）が点在する。さらに、最近大分平野の玉沢地区条里跡でも一基確認された。これは、後に安国寺式土器が盛行する大野川上・中流域では見られない要素であり、豊前南部からの影響の下、国東半島中部から別府湾岸という地域で墓制の伝播と一体となって小川原式土器が成立した、ということが示唆されるのである。今後、他の土器や遺物も含めて、総体としての墓制あるいは祭祀のあり方の具体的検討が必要となってくるだろう。

安国寺式土器の成立と「クニ」

それでは、豊前南部の影響下に成立した小川原式土器と、後期に成立する安国寺式土器の関係はどうであろうか。元々安国寺式土器は後期末の一様式として設定されたものであったが、資料の増加により「様式」とは捉えられなくなり、今では波状文を有す二重口縁をなす壺形土器の一形式名として使用している。このことは、弥生土器は様式として把握できるという大原則を逸脱するものであり、「様式」なるものを逆照射することにもなるのであるが、このことについてはやや異なる面から後述することとし、ここでは、その成立について探ってみることにしたい。

先述したように、小川原式土器が突帯の減少、装飾の消滅、胴部最大径の低下といった型式変化を見せるとしたら、安国寺式土器の成立とは無関係な方向で型式変化を遂げたことになる。では、全く無関係かというところでない。大分市玉沢地区第15号墓の壺（ここでも墓に伴うものであるのは注意）は頸部と胴部上位、胴部中位の三箇所突帯を有し、口縁部は鋤先状で上面に凹形浮文を持つ。突帯の数は三条十四条で古い要素を持つが、小川原式土器と決定的に違うのは胴部の形状である。胴部は最大径をやや上位に持ち、いわゆる卵倒形を呈している。今のところ資料が少なく断定的なことは言えないが、小川原式土器が大分平野に入り、このプロポーシオンを獲得したことが安国寺式土器の成立に繋がったものと考えたい。



- 1 清水遺跡
- 2 清水遺跡
- 3 玉沢地区
条里跡
- 4 玉沢地区
条里跡
- 5 田頭遺跡
- 6 田頭遺跡

第3図 古いタイプの安国寺式土器（各報告書より転載）

分平野周辺が弥生時代中期は球形胴ないし胴部最大径を中（上位）に持つ土器（いわゆる下城式の壺）が主体であったことが大きく影響していると考えられる。

そして、大分平野周辺では後期になって一気に多條化、装飾化が進み、定型化した安国寺式土器を生み出すことになるのである。そう考えられるとすると、浜遺跡¹⁶などで出土している「鋤先状の断面形状十円形、または勾玉状浮文十外面の連続山形文」の口縁部を持つ土器の位置づけが明確になる。従来は、良好な資料が無くその位置づけが不問に付されていたが、小川原式土器そのもの、あるいは大分平野で変化を遂げた玉沢15号のような壺に復元できるであろう。この段階では、突帯は頸部と胴部の二箇所のみ計三箇所¹⁷に廻らされているはずである。そして、後期になり、頸部と胴部上半の突帯が繋がって一箇所になり、安国寺式土器が成立するのである。ここで、古手の安国寺式土器を見ると、胴部中央の突帯が四條である。このことは、小川原式土器の古式段階で、

大分平野周辺にもたらされたことを示している。

それでは、小川原式土器はどうなったのか。大分平野で安国寺式土器への胎動が始まった中期末の段階では、後に定型化した安国寺式土器が広まる大野川中流域まで達し、舞田原遺跡や近中遺跡で、日常生活の土器として使用されていた。そして、この地域の小川原式土器は、大分平野での変化を受けていないことは注意される。これは逆に言えば、安国寺式土器の成立が、より狭い範囲でなされたことを暗示しているとも言えよう。すなわち、大分平野に入った小川原式土器は、一方ではそのまま大野川を遡り、一方は大分平野に留まり大きく型式変化を遂げ、頸部突帯の多条化や胴部最大径の上昇など、小川原式土器とは逆の型式変化を遂げていくのである。

以上のように安国寺式土器の成立を考えると、成立の主体を担ったのは下城式土器を作っていた大分平野周辺の集団であり、北から入ってきた小川原式土器の流入が一つの大きな契機になっていたことが想定できる。それは須玖式土器の大量の流入が大きな変革を在地土器にもたらさなかったのとは対照的である。そこには、先述したように小川原式土器が埋葬用の棺として利用され、また破片を箱状に組み合わせて棺とするなど、墓制と一体となって入ってきたことと関係を有しているのではなからうか。

ところで、大分平野では中期中頃まで下城式土器の壺でアイデンティティを示していたものが、中期後半になると小川原式土器などが出現し、共存するようになる。しかし、数的には下城式土器が多くを占めるが、この中から後期になって安国寺式土器が成立してくるのは何か意識的な選択が働いたと考えざるを得ない。この出来事が大分平野周辺で行われた可能性が高いことは、この地域の政治的優位性を示すものであろう。

この後期初頭の段階で、大野川最上流域の菅生台地周辺にも一挙に安国寺式土器が広まり、一定量を占めるようになる。(ただし、甕については強いローカル色を有する。)後の肥後国との国境ライン、あるいは豊前国との国境ライン、未だ資料的には明確ではないが、日向国との国境ラインなどがおぼろげながらも確定していくのがこの段階である。おそらく、大分平

野を中心とした「クニ」が成立したと考えてよからう。そして、後期を通して安国寺式土器が安定的に型式変化を遂げたことを考えれば、後期初頭に明確になった「クニ」は、古墳時代前期に畿内政權に小地域が個々に取り込まれるまで、一定程度安定したまとまりを保持していたと考えられる。逆に考えると「クニ」は周辺地域の幾つかの小地域を衛星のように持つ連合体であり、その中核に大分平野の集団がいた、というように理解した方がよいだろう。大分平野の調査が進み、「クニ」の中核を示すような遺構が出土することを期待したい。

土器構成と弥生人の心性、あるいは社会

ところで、安国寺式土器の盛行する地域の一つである大野川上・中流域では、各種土器（壺、甕、高坏、鉢など）がそれぞれ違う姿で我々の前に現すのに注意せねばならない。このことは、また弥生土器における「様式」の意味を考えるきっかけにもなる。

大野川上・中流域では、壺はほぼ旧豊後国域に重なるように分布する安国寺式土器を使用する一方、甕は文様から小地域圏を形成し、弥生土器では一般的な高坏や鉢などの小型土器はほとんど存在しない、といった事実である。この解釈について、筆者は、ハケ調整を施す壺（安国寺式土器）は大分平野から持ち込まれたものであり、ナデ調整で壺とは胎土の異なる甕（粗製甕）は在地で作られたと考えた¹⁹。また、玉永氏は小型土器の欠如は畑作中心の生業体系の中から生じた現象である、と解釈した²⁰。また、北郷氏は壺と甕の分布圏のズレから、共同体の二重構造を読み解こうとした。それらの当否はここでは置いておくとして、我々が今一度確認せねばならないことは、土器、という言葉と、その意味するものが、果たして弥生時代社会の復元という目的に適合的なのかどうかということである。つまり、土器、と一括りにしたものの中に、「壺」や「甕」や「高坏」などが含まれる。このことは全く問題ないが、「壺」や「甕」や「高坏」といってそれを差異化したのは現代の我々であり、弥生人では無いと言うことである。

モノの分類 コトの分類	食料等の調達 に関わるもの	食料等の貯蔵・ 移動に関わるもの	調理に関わる もの	祭りなどに関 わるもの
土器		安国寺式土器	粗製甕	小型土器(高坏、鉢など)
石器	石鏃・石斧・石包丁		石皿・磨石・叩石	玉類・石剣
鉄器	鉄鏃・刀子・手鏃・鉄斧			
その他の遺物	(木製農工具)	(網・袋)	(火起こし・薪)	鏡片?、ベンガラ
遺構	(陥穴)	(倉庫)	竪穴住居<炉>	(墓・祭祀土坑・大型掘立柱建物)
象徴する事柄	交流・交換 ←		→ 日常	← 精神性・象徴性

()内は、大野川上・中流域で未発見のもの。横の分類(モノ)より縦の分類(コト)が、社会あるいは弥生人の心性の復元には役立つのではない。ただし、ここに示した縦の分類は、壺と甕と小型土器のあり方が異なる説明をするための全くの試案である。鏡片の「?」マークは、次項で触れるように、おそらくはそのカテゴリーには分類されないだろう、ということを示している。また、下段の両矢印は、概念上対立するというを示している。

第4図 モノとコトのマトリックス (試案)

「壺」や「甕」などといったカテゴリーに分けた土器が、我々の前に異なったあり方を示すのは、「壺」や「甕」という差異化そのものは間違っていないものの、それらを「土器」というカテゴリーで差異化することが、弥生人の活動(または心性)を映し出すことに必ずしも繋がらなかったのではないか、という疑問を抱かせるのである。

例えば、煮炊きを使う甕が「調理に関するもの」というカテゴリーに分類されていたならば、弥生人にとっては、「甕」は「壺」とではなく「磨石」や「石皿」と仲間という意識を持ったかもしれない。また、「高坏」などの小型土器が欠如しているのも、「土器」というカテゴリー(第4図の網掛け部、これは単に素材で分けたに過ぎない。)で考えたときに我々がそう思うだけであり、弥生人が別のカテゴリー(例えば「祭りに関わるもの」)に分類していたのなら、そのカテゴリー内における欠如の意味を考えていかないと、当時の社会に迫ることはできないと思う。むしろ、大野川上・中流域では祭祀や墓

の副葬品として使用するということが無かったために、生活の中に小型土器が入ってこなかったのではないのか、ということも考慮せねばなるまい。

では、土器がそのようなものであるとしたなら、甕に示される小地域圏は何を意味しているのであろうか。突帯で文様を付けること、あるいは沈線で文様を付けることは恣意的であり、何ら必然性はない。だから、そのスタートが何故四本突帯なのか、或いはどうして平行沈線なのか、またはどうして文様を付けるのか、といったことはあまり意味をなさない（とは言っても系譜問題は重要である）。むしろ、そのような決定がその後、後期を通して保持されたことの方が、小地域圏を超えた社会の有り様を示しているのではなからうか。即ち、出発点は全くの恣意的な選択でしかなかったものが、一度決まってしまうと、社会的な拘束によって一定の方向に型式変化していくのである。つまり、その社会的拘束性の強さ、あるいは近接していても折衷土器を生み出す事がない、といった拘束性の内容がこの地域の特徴なのである。この部分を「保守的」、あるいは「停滞的」、または「繩文的」といった言葉だけで表現できるのかどうかが問われていよう。

破棄された鏡片の意味

次に、この地域の弥生時代後期後葉から古墳時代初めにかけての住居跡から出土する鏡片について考えてみよう。これらの鏡片に早く注目したのは高橋氏である。高橋氏は、これらの鏡片は北部九州の首長から権威の象徴物として「配布」を受けたものである、とし、その機能が失われた段階で一斉に集落内に廃棄された、と考えた。そのことについて、別な解釈は可能であらうか。

まず、この「鏡片」という言葉には、その対置されるものに「(完)鏡」があるという暗黙の了解事項が含まれている。では、「鏡片は鏡の一部である」という認識が我々にはあるが、当時の大野川流域の人々にとってもそれが了解事項だったのだろうか。即ち、鏡片は鏡の機能を代替する、あるいは少なくともその一部を担うものという認識があったのかどうかである。

このことは、鏡片が出土することの意味を考える上で前提となる問題である。

中期から墓の中に鏡を副葬する北部九州に対して、その周辺地域では後期の後半になって鏡片が住居跡から廃棄されたように出土する。このことは、高橋氏が「特定個人の所有」対「共同所有」という図式で理解したが、共同所有のものが、極めて各個に帰属する可能性の高い住居の跡から出土するというのは矛盾があると言わざるを得ない。やはり単純に言って鏡片が完鏡の機能の一部を代替していたものではないことを示していると考えた方が自然である。むしろ、玖珠・日田地域や、豊後高田、宇佐地域など北部九州により近い地域では、ペンダントにした比較的大きめの鏡片を墓に副葬している。このことは、まさに完鏡の代替品としての機能を有していた、と考えて良いだろう。つまり、逆に大野川流域では「鏡片ハ完鏡」といった価値の差は感じていなかったに違いない。我々が到達していることは、単に「鏡片」は「完鏡」から生じた、という事実の把握だけである。当時の人が「鏡片」をどんなカテゴリーに分類していたのかは別問題であり、今後解明していかなければならない課題である。

また、「配布」といった行為はいかなる実態を示すものであろうか。一方的な「贈与」なのか、あるいは何らかのモノと「交換」した結果なのか。この点についても具体的な考察が求められるであろう。

畑卓越地帯弥生社会の系譜

筆者は、約三十年前に北郷氏がこの地域の弥生文化について述べた事柄が頭のどこかに引っかかりながら、常にこの地の土器や社会について見てきたように思う。それは、ハ山間部―対―平野部Vの対比の中でハ国家V出現前後の共同体のあり方を探る、というもので、「同一型式の甕形土器に表象される規範をもって、地域共同体としての主体を確立し、しかし、その地域共同体としての特有な性格をこわすことなく、その上に他の地域共同体がすっぽり接木されている、きわめて、ハアジアV的・ないしはハ列島弧V的ハ小国家V存立の原理的様態」を読み取ったものである。当時としてはきわめてオーソドックスな

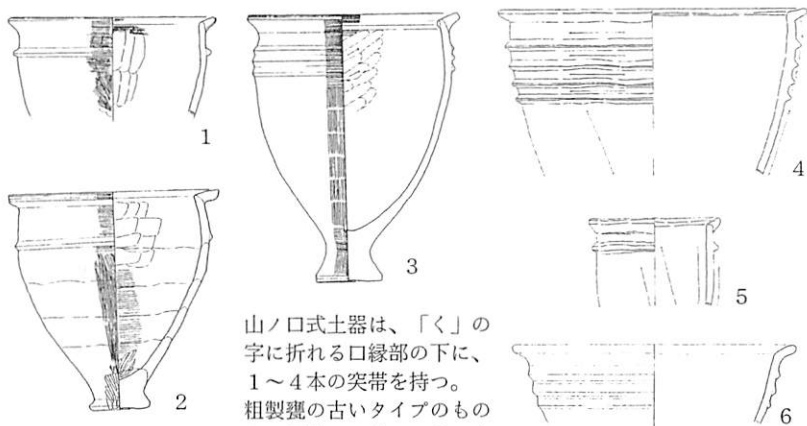
唯物史観的（公式主義的）な見方であり、それがために後にそこから大きな展開が望めなかったのは必然であったが、粗製甕の小分布圏を「地域共同体」とし、安国寺式土器の分布圏を上位の「地域共同体」に設定し、この地の社会の二重構造を顕現化したことはきわめて慧眼であったと言えるだろう。

しかし、問題は「地域共同体」なるものの実態の解明であった。ここでは、主に粗製甕に焦点を当てながら、大野川上・中流域の弥生社会の実相について見てみよう。

大野川上・中流域弥生社会をそこに特徴的な工字状突帯を持ついわゆる「粗製甕」の系譜を縄文晩期粗製深鉢に求めて、「畑作を基盤とし狩猟・採集を合わせ持つ生業体系」の社会を想定したのは玉永氏である。また、氏は先述したように小型土器の欠如は「縄文にみる深鉢文化をみるようである」と述べるなど、畑作そのものの系譜も縄文時代の畑作に求め、この地の弥生社会を縄文文化の伝統を残す「保守的な文化」と位置づけているのである。果たして、本当にこの地の弥生文化は「保守的」な縄文文化の末裔なのであろうか。私は、別な考え方も成り立つのではないかと考えている。それは、中期末に始まるこの地の文化体系は、完成された畑作技術の伝播、あるいはそれを携えた人々の移住によりもたらされたものではなかったか、という事である。

このことを考えるには、粗製甕の系譜の解明がキーになる。これには従来二つの考えがあって、ひとつは前記したように玉永氏に代表される「縄文晩期土器」説、もうひとつは北郷氏等による「下城式土器」説である。高橋氏がミッシングリングとして抽出した弥生時代前期の「統刻目突帯文土器」と呼ぶものをその祖型とする考え方も基本的には「縄文晩期土器」説に含まれよう。

粗製甕の胎土・色調・焼成が縄文晩期の粗製甕に似ていることから「縄文晩期土器」説が出てきたが、肝心の形態は全く異なる。そして、北郷氏が「空白の過渡期」と言った弥生時代前・中期の空白（遺跡がほとんど見つからない）は、時間の長さにして数百年の隔たりを生じさせているのである。「下城式土器」説にしても、形態はもちろんのこと、調整手法（下城



山ノ口式土器は、「く」の字に折れる口縁部の下に、1～4本の突帯を持つ。粗製甕の古いタイプのもも、同様に4本、1本の突帯を持つ。

- 1～3 王子遺跡（鹿児島県）
 4, 5 鳩ノ原遺跡（竹田市）
 6 石井入口遺跡（竹田市）

第5図 山ノ口式土器の甕と古式の粗製甕

式はハケ調整、粗製甕はナデ調整）も異なる。つまり、現状では両説とも決定的とは言えないのである。

現状で粗製甕に形態的に最も近似した土器をあげれば、鹿児島薩摩半島を中心に分布する「山ノ口式土器」の甕であろう。この山ノ口式土器の分布は宮崎県中部ほどまでであるが、南九州の黒ボク土の分布にはほぼ重なっている。一方、北部九州の黒ボク土の分布にはほぼ重なっているのが粗製甕である。このことは、地理的条件がきわめて類似した条件下で偶々同様の土器形式を生み出した事を示すのか、あるいは相互に何らかの影響があった事を示すのであろうか。

豊後大野市（旧犬飼町）舞田原遺跡では、花弁型住居と呼ばれるタイプの住居跡が見つかっている。このタイプの住居跡は散漫な分布ではあるが、鹿児島県から宮崎県の北部までである。一方、鹿児島県でも、東九州的な土器の出土が知られるなど、南九州と東九州は相互に交流があったことがわかる。粗製甕の古いタイプのもの（中期末に位置づけられる）は、「工字状突帯」にならずに、突帯を四条あるいは一条巡らせるものであるが、このタイプのものが後期になって粗製甕を盛行させる地域ではなく、より宮崎に近い佐伯市（旧直川村）源六原遺跡や竹

田市（旧荻町）鳩の原遺跡³⁹、竹田市太田原遺跡⁴⁰などで確認されているのである。さらに山ノ口式土器も壺と甕の占める割合が高く、高坏などの小型土器が少ないことも大野川上・中流域の土器組成と類似している⁴¹。

今のところこれ以上の言及はできないが、弥生時代中期後半に南九州から東九州までの山間・台地部で、きわめてよく似た文化体系を有した人々が居住していたと考えたい。そして、山ノ口式土器との時間差を考えれば、それは南から北へ、という動きの中で形成されたものである可能性が高い。つまり、大野川上・中流域はその文化圏の北の端に位置し、大野川を通して平野部の文化圏にも接していた、つまり北郷氏のいう「二重構造」は、やや姿を変えた二重構造として浮かび上がってくるのである。このように大野川上・中流域の弥生文化は、縄文文化の直接的な末裔などではなく、米作中心の北回りの弥生文化に對して、畑作中心の南回りの弥生文化の最前線とも呼べるものではなかったろうか。このような解釈も成立するという可能性も考慮しながら、様々な遺構・遺物の検討が必要であろう。

おわりに

大分県の弥生時代はどこまで解明されたのか、というテーマで書き始めたが、一つ一つの事柄を突き詰めていくと、実はまだ解明されていない事柄が多く残されているという事があらためて判った。いや、むしろ今まで我々が遺物や遺構を詳細に観察し、分類し、分布を調べ、型式変化を追っていけば、自ずと社会が復元できるという帰納的な方法を疑わずに過ごしてきた、といったことがあらためて判った、と言った方が良いのかもしれない。

今、考古学の分野でも「認知考古学」や「心の考古学」といった研究がようやく見られるようになってきた。「知」の体系は刻々と変化（進化ではない）している。様々なものの見方、考え方があるのであり、当然答えも一つではない。一つの答えを追いかける議論より（もちろん必要な場合もあるが）、途中の筋道を議論し合う方が「学」としては成熟できるのではないか。そのような議論を今後期待したいと思う。その中から大分県の弥生時代の姿が複雑にきらめきながら浮かび上がって来るだろう。

まだまだ、言及せねばならない課題（大分における水田稲作開始期に関わる問題、広域に分布する下城式土器の系譜の問題、埋没微地形の検出による弥生時代の古環境復元に関わる諸問題、など）が多いが、筆者の力量不足から全く触れることができなかった。これらについてはまた後日を期したい。

(1) 一九八四年発行の『講座日本歴史』（東京大学出版会）では、大野川上・中流域の畑卓越地域の社会が取り上げられていたが、二〇〇四年発行の『日本史講座』（東京大学出版会）ではそのような記述はない。もちろん、著者の興味の問題や、当時の学問的問題点などに よるとはいうものの、やはり新しい展開が見られないことが大きく作用しているように思われる。

(2) 『舞田原』 大飼町教育委員会 一九八五

(3) 『大野原の遺跡』 大野町教育委員会 一九八〇

(4) この地の編年をリードしてきた高橋徹氏も、近中遺跡1号住出土土器を a では中期後半に位置づけ、b では後期初頭に位置づけるなど位置づけが定まらないように、良好な共伴資料も少なく、その位置づけに苦慮するところである。しかし、ここでは安国寺式土器の成立を後期の始まりとする立場から、この種土器を中期後葉から末に位置づける。

a 「大分県史 先史篇Ⅱ」 大分県 一九八九

b 「大分の弥生・古墳時代土器編年」『大分県立博物館研究紀要』2 大分県立博物館 二〇〇一

(5) 高橋徹「廃棄された鏡片」『古文化談叢』第6集 九州古文化研究会 一九七九

(6) 『成田尾遺跡・今村遺跡・馬場尾遺跡』 大分県教育委員会 一九九二

(7) 『古城得遺跡・小川原遺跡』 大田村教育委員会 一九九六

(8) 『駅館川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』 宇佐市教育委員会 一九八七

(9) 左記文献において、安山岩製箱式石棺は弥生時代中期には豊前地方のみに存在するとされたが、その後確実に弥生時代中期に属する箱

式石棺が豊後地域においても確認された。別府湾岸北部で石材が産出するので、石材の入手しやすさといった面もあったのかもしれない。

清水宗昭・高橋徹「大分の石棺」『九州考古学』第56号 九州考古学会 一九八二

(10) 『大分県内遺跡詳細分布調査概報』3 大分県教育委員会 一九八四

(11) 『羽室遺跡発掘調査概報』 大分県教育委員会 一九八三

(12) 『玉沢地区条里跡 第2次発掘調査報告書』 大分市教育委員会 二〇〇二

(13) 大野川上・中流域では、墓そのものがほとんど確認されておらず、どのような墓制であったのか不明である。

(14) 左記賀川文献aでは、安国寺式土器を後期末の様式として設定したが、資料が増加するに伴って共存する甕に地域差が顕著となり、様式としては捉えられないようになってきた。左記玉永文献bでは、そのことを踏まえ後期後葉から末を「安国寺期」とすることを提唱するが、その後定着することなく、「安国寺式土器」⇨「楢描き波状文を有する二重口縁壺」という解釈が定着している。

a 賀川光夫「大分県国東町安国寺弥生式遺蹟の調査」九州総合文化研究所 一九五八

b 玉永(羽田野) 光洋「東九州における弥生式土器研究Ⅰー安国寺式土器の再検討ー」『古文化談叢』第5集 九州古文化研究会 一九七八

(15) もちろん二重口縁化や突帯の多条化など、汎西日本的な動きの中で歩調を合わせた動きであったのも間違いない事実であり、小川原式土器の存在はあくまでベースの土器形式が何であったかという問題である。

(16) 『浜遺跡』 大分県教育委員会 一九八〇

(17) 大分平野では、先述したように平野部の玉沢地区で中期後半から後期にかけての墓地が確認されたが、この大分川下流域(玉沢地区はその支流の七瀬川流域)のあたりが、豊後域における後期弥生文化の牽引役を果たした地区の一つであったのではなからうか。

(18) 壘形土器の地域圏にはほぼ等しい範囲で前期古墳が築造されていくことで想定される。

(19) 小柳和宏・三辻利一「大野川流域における土器の移動」『おおいた考古』第2集 一九八九

- 小柳和宏「土器から見た上流域弥生社会」『菅生台地と周辺の遺跡』XV 竹田市教育委員会 一九九二
- (20) 玉永光洋「山の生活」『風土記の考古学4』 同成社 一九九五
- (21) 北郷泰道「祖母・傾山系山岳地域論序説」『考古学研究』第25巻3号 考古学研究会 一九七八
- (22) ちなみに「壺」が「運ぶもの」といったカテゴリーに分類されていれば、籠や網などと一緒になっていたかもしれない。
- (23) 註5 高橋文献
- (24) 註20 玉永文献の64頁
- (25) 高橋徹「東九州における突帯文土器とその周辺」『古文化談叢』第12集 九州古文化研究会 一九八三
- (26) 下城式土器の最大の特徴は、口縁部が「く」の字状に折れず、真っ直ぐ延びることである。頸部で一度窄まり口縁部が外反して開く、という弥生土器の原則から外れている。粗製甕はちゃんと口縁部が開く。
- (27) 『王子遺跡』 鹿児島県教育委員会 一九八五 など
- (28) 『源六原遺跡発掘調査概報』直川村教育委員会 一九九三
- (29) 『萩台地の遺跡Ⅸ』 萩町教育委員会 一九八五
- (30) 『太田原遺跡』竹田市教育委員会 一九八三
- (31) ただし、形態的にも若干異なる(特に底部形状)し、外面の調整が山ノ口式土器の甕ではハケ調整であるが、粗製甕の古いタイプのはミガキが施されるなど、彼我の土器で差はある。
- (32) 大野川上・中流域で多く出土する磨製石鏃も、山ノ口式土器に伴って多く出土している。山ノ口式土器に伴うものは正三角形に近いタイプが多いが、大野川上・中流域でも中期末のものは正三角形に近い、という類似点もある。